２２. 隠元橋周辺の発見その２　「岡屋津」

フェイスブック掲載日 2021/10/12

先日アップした「隠元橋周辺の発見その１」に府会議員の水谷さんから、「岡屋津を調べてみては」とのアドバイスをいただきました。さっそく調べたところ、私にとって歴史認識を改める大変貴重なアドバイスとなりました。

地図をご覧ください。太閤堤ができるまでの巨椋池周辺の姿です。岡屋津は巨椋池の津だったのです。宇治川・淀川水運の要衝で、巨椋池をはさんで西の淀津とともに東の岡屋津として、国の内外の船が集まり、物産の積みおろしに賑わう重要な港でした。

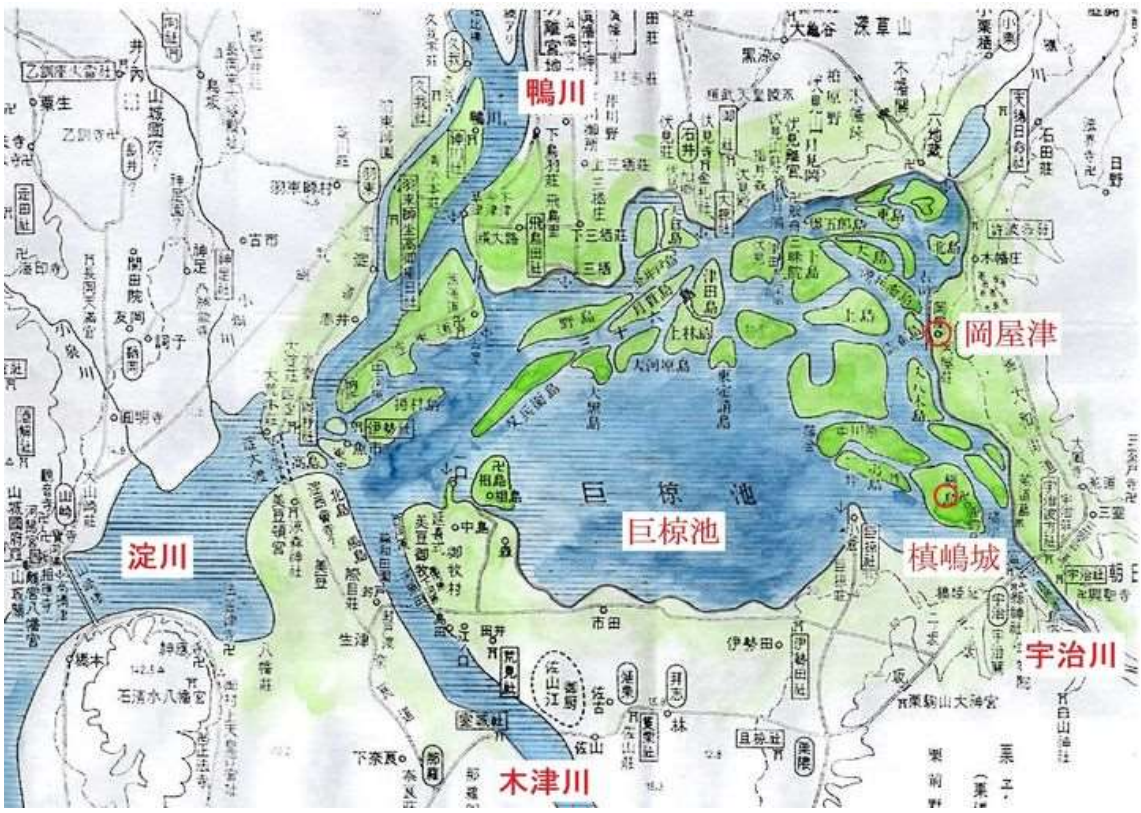
巨椋池干拓誌（昭和 37 年 10 月　巨椋池土地改良区発行）には、「室町期に編纂された『善隣国宝記』によると、建治元（1275）年正月十八日、蒙古人二人、高麗人一人、明州人一人鎮西より送られ、皆京都に入らず、山崎より岡屋・醍醐を経て関東に趣いていたのである。この一行の道順はこの文章よりみて当然淀川水運により山崎から巨椋池に入り、岡屋に上陸したものと思われるのである。鴨長明も岡屋に行きかう舟はこのところ往返の舟なり云々、と述べているが、岡屋の浜はすなわち後世の隠元の渡し場であり、古くから巨椋池を横断して岡屋に上陸し東国に向かう重要なる通路であったことが知られる。」と書いています。大層に言えば、国際色豊かな港だったのです。

元亀四年（1573 年）には、室町幕府将軍足利義昭が、織田信長に対して兵を挙げ槇島城へ籠城したが、岡屋津に陣取った織田信長の前に屈服、室町幕府が実質的に終焉し、時代が大きく変わる歴史的な舞台となった所です。

いままで私は、宇治川を挟んで対峙していたと思っていたのですが、地図を見れば、双方の位置関係がよく分かりました。

しかし、文禄三年（1594）、豊臣秀吉によって、宇治川左岸の堤防、槇島堤が構築され、岡屋津は巨椋池から切り離され、以後衰退しました。

太閤堤による不自然な宇治川の流れの形成や、自然環境、文化の破壊などを考えたとき、宇治市による総事業費 73 億円をかけた「宇治川太閤堤跡」等のイベント的な整備が果たして妥当なものであったのか、疑問を抱いています。


鴨川
岡屋津
巨椋池
巨椋池
槙嶋城
淀川
宇治川
木津川